

『天下白』と宋元医学書

池田昌広

一 問題の所在

日本中世の禅林にとつて、蘇軾（号は東坡）の詩は、黄庭堅（号は山谷）のそれとともに極めて近い存在であった。流行のほどは「東坡、山谷、味噌、醤油」の言葉が当時あったことから知られよう。蘇軾詩はすでに南北朝時代には講ぜられ、いくつかの蘇軾詩抄が成った。万里集九（一四二八～一五〇七ごろ）が撰した『天下白』二十五卷は、そのうちの代表的な抄物である。博識を隠そうとしなかつた蘇軾の^①こと、その詩を読解するには種々の漢籍をひもとく必要がある。この点、宋人の注が有用なわけだが、『天下白』もよく努めている。小論は『天下白』が引用する漢籍のうち、宋元代に成立通行した医学書に限定し調査した結果を報告するものである。

論頭にあたり、わたしが小論を企図した理由について数言を費やしたく思う。第一に宋元の医学書に着目したことについて。宋代の士大夫は養生をふくめ医術に明るかつた。なかでも北宋の蘇軾と南宋の陸游とは双壁である^②。蘇軾の詩文は医術や養生に関する記述に富む。明末の王如錫が『東坡養生集』十二巻を編んだ所以である。ひるがえって日本の禅僧も医術にくわしかつた。中世になると、旧来の医療技術を墨守した官医が退場し、かわって宋元の新しい医学を学んだ民間の僧医が活躍するようになる^③。なかでも禅宗は教団として充実した

医療組織をもち、禅宗系僧医は積極的に新渡の医学書を受容した^④。つまりとこる禅僧による蘇軾詩抄は、宋元医学書の舶載状況を知るうえで、調査する価値のたかい書と位置づけられる。そのような調査が十分果たされていない現状にかんがみ、わたしは小論を構想した。

第二に複数現存する蘇軾詩抄のうち『天下白』に着目したことについて。端的に言えば、『天下白』が最も漢籍の引用に富むと思われるからに外ならない。五山僧の蘇軾詩抄は、笑雲清三編『四河入海』二十五卷（一五三四年成）に結実した。同書は『天下白』のほか三つの蘇軾詩抄——大岳周崇（一三四五～一四二三）の『翰苑遺芳』、瑞溪周鳳（一三九二～一四七三）の『脛説』、桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）の講釈を一韓知翹（？～？）がまとめた『蕉雨餘滴』（別名「一韓聞書」）——を集成し、さらに笑雲の自説と蘇詩の正文とをくわえた巨冊である^⑤。『翰苑遺芳』は、南宋の施元之・顧禧注（いわゆる施顧注）の抜き書きが大部分を占める。『脛説』と『蕉雨餘滴』とは（笑雲説もふくめ）主として詩意を説き、漢籍によつて考証することにあまり熱心でないように見受けられる。『天下白』も詩意を説くこと『脛説』らと同様ながら、引証癖とでも言うのか、詩語の解釈にしばしば漢籍を引く。万里は五山を代表する漢詩人とされるが、その本領が作詩より講学にあつたこと、五山文学研究の大家であつた玉村竹二と蔭木英雄とが喝破している^⑥。万里の好學が『天下白』に反映しているというわ

けだ。

第三に地方の禅宗寺院の蔵書について。万里が加注にあたり比較的多く漢籍を引用できたのは、かれの資質もさることながら、美濃国南豊山承国寺の蔵書を利用できたことが大きかったと推される。同寺が豊かな蔵書を有していたことを次章で説くけれど、小論の考証は同寺の蔵書の一部分を復元する試みでもある。当時の地方の有力寺院がいかなる漢籍を蔵していたかという問題は、中国文化の地方伝播を論ずるうえで看過できない。

ついで『天下白』のテキストについて述べておく。わたしは以下の三本を併覧した。

a 本…慶應義塾大学蔵鈔本（請求記号：110X@422@14@1）

b 本…国立国会図書館蔵鈔本（請求記号：WAI6-104）

c 本…『四河入海』古活字本所引『天下白』

a 本は良叟性温らが天文十一年（一五四二）に鈔写した二十五巻の足本で、いま慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションにてWEB公開されている。『天下白』が成ったのが文明十四年（一四八二）だから、成書から六十年後の鈔写ということになる。b 本は巻一・二・五・八・二十～二十五の都合十巻を缺く不全本で、鈔写の経緯も詳らかでない。ただ a 本が省略した挿図も丁寧に写した優本である。いま国立国会図書館デジタルコレクションにてWEB公開されている。c 本は『四河入海』に含まれた『天下白』である。いま岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』第二～五巻（清文堂、一九七一年）に、宮内庁書陵部蔵古活字本『四河入海』が影印され、小論はこれによる。万里注の所在は、a 本と b 本とはWEBで指示されたコマ数、c 本は影印本の頁数によってしめす。

本来であれば『天下白』を通読し、医学書の引用ぶりを一々点検す

べきであるが、蘇軾の詩はおよそ二千八百首⁸⁾もある。そこで便宜、慶振軒・李孟羣主編『蘇軾詩文涉医文化文献輯要』（蘭州大学出版社、二〇二〇年。以下、『文献輯要』）に収載された蘇軾詩を調査の対象とする。同書は蘇軾の全詩文から中国医学に関わるものを抄出した一種の資料集で、詩は百八十首をおさめる。蘇軾の詩集はテキストによって、収録する詩および排列の順次が異なる。五山僧は蘇詩の閲読おもに『王状元集百家註分類東坡先生詩』（以下、王本）二十五巻によった。『天下白』も王本に準じて編纂されている。王本には五山版があり、同本は影印され小論はこれによる。⁹⁾『文献輯要』収録詩のうち二十八首が王本未収のようだから、小論の調査対象は百五十二首ということになる。くだんの百五十二首の王本および『四河入海』『天下白』における所在は、岩山泰三『四河入海』詩題索引稿（一）～（三）』『古典遺産』第四六～四八号、一九九五～九八年）、および本科研費で池田が制作した王本目録によって検索した。

二 万里集九と承国寺の蔵書

万里は応仁の乱を近江や美濃に避け、文明年間に還俗して、美濃国鵜沼に「梅花無尺蔵」と号する庵室を構えた。かれが蘇詩を講じ『天下白』を執筆したのはこの鵜沼において、時は文明九年（一四七七）正月から同十四年十一月である（a 本巻二十五末尾の識語）。万里の居処近くに南豊山承国寺があり、かれは同寺の詩会にしばしば出入りするなど密接な関係をもった。¹⁰⁾そもそも蘇詩の講義は、承国寺春沢軒の梅心周庸の発起によるもの¹¹⁾のようで、梅心の居所が講義の会場であったと推される。

承国寺は、現在の岐阜県各務原市にあった臨濟宗の寺である。美濃

国守護の土岐持益が開基檀越となり、夢窓派華藏門派の鈍中全鋭を開山に請じて創建された。その時期は十五世紀半ばと推されるが詳細は明らかでない¹²⁾。以後、土岐氏および夢窓派華藏門派と密接な関係をもった。夢窓派華藏門派は室町幕府の外交において重きをなした門派である。承国寺に関する記録は、一五二〇年代初めに途絶え、間もなく廃寺になったと考えられる。一九九六年に発掘調査がなされ、遺構の一部が明らかになった¹³⁾。

承国寺は豊富な蔵書を有していたらしい。同寺の蔵書に関する記録を、中川徳之助ほかの研究によりながら、いくらか挙げてみよう¹⁴⁾。月舟寿桂（一四七〇～一五三三）の「江叔字説」（『幻雲文集』統群書類従本三二八～三二九頁）にかくある。

南豊沅公侍者、字云江叔。遠寄装軸、需作之説、予説其義曰……宋曾氏南豊先生、家藏之書二万餘卷、手自校讎、白首不倦……竊聞、今之南豊藏天下書、不減古之南豊。公幸在南豊而富春秋、六經于朝、百家于暮、露抄雪纂、孜孜不止。

「沅公侍者」は未詳¹⁵⁾。「宋曾氏南豊先生」とは唐宋八大家の一人で蔵書家としても知られた曾鞏。月舟は承国寺の蔵書は曾鞏のそれに匹敵するという。傍線部分の典拠は南宋の王偁『東都事略』であろう。その巻四十八、曾鞏伝に「平生著書、家藏至二万餘卷、手自讎对、雖白首不倦」とある。『東都事略』は北宋の事蹟を紀伝体で記した史書で、五山僧の頻用するところであった。『天下白』も頻繁に引用する。

彦竜周興（一四五八～一四九一）の「前現福胤仲禅師住洛北真如、同門疏」にも「南豊藏二万餘卷書」とある（『半陶文集』巻一。『五山文学新集』第四卷八七〇頁）。直接に曾鞏の蔵書の多さを、間接に承国寺の蔵書の豊かさをいう。彦竜は承国寺と親しく万里に親炙した¹⁶⁾。胤仲は承国寺に出身し、文明十九年に春沢軒に勤有軒を新築し住した。なお

彦竜が該文をものした文明十一年は、万里による蘇詩講義の真つ最中であつた。

万里の「還春沢之書籍」にかくある（『梅花無尺蔵』巻四。『五山文学新集』第六卷八七〇頁）。該文は明応末年ごろの作と推される。へ内は双行注、以下おなじ。

十七史全部四十五冊、史記全五十六冊、漁隱前集五十卷、後集四十卷（已上九十卷）、詩林広記前集十卷、後集十卷（已上二十卷）、以漢書之前集後集、以上十九冊、還南豊之方丈（謹白、平生多懶眠、付書籍、一々完全奉還春沢）。

万里は春沢軒主の梅心を介して、おそらく承国寺の経蔵から借りたのだろう。

以上、承国寺の蔵書の豊かさを伝える記録を紹介した。同寺がかくも豊富に書籍を収蔵できたのはなぜか。その背景に土岐氏の手厚い外護と、夢窓派華藏門派の人的ネットワークとを想定することは合理性がある。室町時代に幕府をはじめ日本の諸勢力が、朝鮮王朝に大蔵経を求請したことはよく知られる。康正二年（一四五六）、足利義政名義の日本国王使が朝鮮王朝に派遣された。この遣使が、土岐氏による幕府への要請により実現したこと、創建されて間もない承国寺のための大蔵経求請使であつたことを、伊藤幸司が明らかにしている¹⁷⁾。このとき一帙だけが求請に成功した。長祿二年（一四五八）八月以前に、承国寺は早くも諸山に昇格した。その背景に大蔵経の一部獲得があつた可能性も伊藤は指摘する。日本国王使として派遣された承伝首座と梵準蔵主とは、夢窓派華藏門派の僧と推され、同派と承国寺との密接な関わりがうかがえる。承伝はこの時、『大学』『中庸』『論語』『孟子』の四書各一部を朝鮮国王より下賜されている（『世祖実録』巻三、二年四月己酉）。また承国寺の衆善軒主盟蒲庵老師は、高麗に使いして

経を持ち帰り、南豊の蔵殿に収めたという（『梅花無尽蔵』巻五。『五山文学新集』第六卷九〇一頁）。蒲庵は承伝らと日本国王使として渡海したのであり、かれらの将来した書物は承国寺に収蔵されたということだ。なお蒲庵は文明九年ごろより万里と親しく交わった。

ひるがえって鶴沼に移った万里の蔵書はどうであったか。万里「立春前一日寓興」の詩序にかくある（『梅花無尽蔵』巻一。『五山文学新集』第六卷六五八頁）。

余平生所貯一床之書、僅二十餘部……丁亥駭屑以還、太半亡失矣。隨身唯一張紙被、々亦於江左道上、賊兵奪之。寔天步艱難時乎。亡失之中、猶堪可惜者、所自膽書之文選而已。

「丁亥駭屑」は心仁の乱のこと。京都からの逃避行のうちに、架蔵書の大半を失ったようだ。鶴沼における万里の経済状況は、講義や作詩の謝礼、写本の報酬のほか、守護代の斎藤氏の援助などの収入があったようだが、決して豊かとはいえなかった。購書の餘力などなかったであろう。かれが『天下白』を著述し得たのは、まず承国寺の豊かな蔵書あつたればこそであり、したがって『天下白』に引用された漢籍はほとんど承国寺の蔵書であつたに違いない。万里は加注にあたり、どのような宋元医学書を手にしたのか。換言すれば、承国寺はいかなる宋元医学書を蔵していたのか。

三 『經史証類大本草』

万里は「大本草」なる書を引く。『文獻輯要』が収載する詩では、左記の五詩の注解にくだんの引用が見られる。

① 王本卷一「入峽」詩の「聞道黄精草、叢生緑玉簪」句の「黄精草」への万里注。a本は第一冊四三コマにあるべきも見あたら

ず、そもそも当該詩の万里注をほとんど誤脱、底本の問題か。

b本は缺巻、c本は第一冊一三四〜一三五頁。挿図なし。

② 王本卷十四「和子由盆中石菖蒲忽生九花」詩の冒頭「無鼻何由識蒼蘂、有花今始信菖蒲」句の「蒼蘂」への万里注。a本は第七冊五三コマ、b本は第十冊二七〜二八コマ、c本は第三冊八六頁。三挿図あり。

③ 王本卷十六「謝王沢州寄長松兼簡張天覺二首」詩の其二「便将径寸同千尺、知有奇功似茯苓」句の「茯苓」、および同其二「無復青黏和漆葉、枉将鍾乳敵仙茅」句の「仙茅」への万里注。a本は第八冊四四コマ、b本は第十二冊一九コマ、c本は第三冊二五八〜二五九頁。一挿図あり。

④ 王本卷十七「在彭城日与定国為九日黄樓之会……」詩の冒頭「菊酸蘂囊自古伝、長房寧復是臞仙」句の「蘂囊」への万里注。a本は第九冊九〜一〇コマ、b本は第十三冊九コマ、c本は第三冊三三三〜三三四頁。一挿図あり。

⑤ 王本卷二十四「帰宜興留題竹西寺三首」詩の其二「道人勸飲雞蘇水、童子能前鶯粟湯」句の「雞蘇水」への万里注。a本は第十三冊五コマ、ただし当該万里注は見あたらず。b本は缺巻、c本は第四冊四六六頁。挿図なし。

「大本草」は如何なる本草書か。④を例に検討しよう。「蘂囊」とは菜蘂を入れた袋をいう。菜蘂には、呉菜蘂（和名はカワハジカミ）、食菜蘂（カラスザンショウ）、山菜蘂（サンシユユ）などがある。このうち呉菜蘂を入れた菜蘂囊を重陽節に飾る習俗はよく知られよう。くだんの習俗は、南朝梁の呉均『続齊諧記』が伝える、桓景が道士の費長房の言葉にしたがい、九月九日に菜蘂の入ったあか絳い袋を着け、高いところに登り、菊花酒を飲んで災難から逃れることが出来た故事にちな

む。蘇軾の詩句はこれに典拠し、王本注も抜かりなく『続齊諧記』を引用している。『天下白』はまず「茱萸多品」といい、「越州呉茱萸」と題する植物図を挿入する。

万里は何から本図を写したのか。その答えは挿図のすぐあとに記された万里の注文で判明する。やや長文だが全文を引用する。

大全本草第十三木部中品、越州呉茱萸。日華子云、茱萸葉熱無毒、治霍乱、下氣治心。図経云、呉茱萸生上谷川、谷今処々有之、江浙蜀漢尤多。木高丈餘、皮青綠色、葉似椿而闊厚紫色、三月開花紅紫色、七月八月結実、似椒子、嫩時微黄、至成熟則深紫、九月九日採陰乾。風土記曰、俗尚九月九日、謂为上九茱萸、到此日、氣烈熟色赤、可折其房以挿頭、云辟惡氣禦冬。又続齊諧記曰、汝南桓景隨費長房学、長房曰、九月九日汝家有災厄云々。蜀州食茱萸注云、皮薄開口者是、雖名為食茱萸、而不堪多噉之也。陳藏器云、樹皮殺齒牙虫止痛、本經已有呉茱萸云、是口折者、且茱萸南北綫有以呉地為好、所以有呉之名。兗州海州有山茱萸、枝葉花実与呉茱萸異。

冒頭に「大全本草第十三木部中品」と見える。この「大全本草」は『経史証類大全本草』三十一巻の略称である（以下、小論も『大全本草』と略称）。本書の紹介は後回しにして、万里注の典拠を確認しておく。

まず挿図は『大全本草』巻十三木部中品「呉茱萸」からの転載である（図自体は『嘉祐補注本草図経』のそれ²⁰）。「日華子云々汝家有災厄」も『大全本草』同条に引かれた「日華子」（宋・日華子『日華子諸家本草』二十巻）と「図経」（『嘉祐補注本草図経』の解説文）との文章を転載したものである。「蜀州食茱萸注云々所以有呉之名」は、同条の少し後頁、「食茱萸」所引の「唐本注」（唐の『新修本草』注）と「陳藏器

（唐の陳藏器『本草拾遺』十巻）との文章からの転載である。ついで「兗州海州有山茱萸、枝葉花実与呉茱萸異」について。『大全本草』は「食茱萸」の少し後頁に「山茱萸」の項をもうけ、「兗州山茱萸」と「海州山茱萸」とを图示し解説している。万里は本条を見たはずだが万里注に一致する文章はない。おそらく「呉茱萸」と「兗州山茱萸」「海州山茱萸」と各挿図を比較して、万里が作文したのであろう。つまり、上掲の④はほぼ『大全本草』からの引用なのである。万里は『大全本草』（あるいはその抜書）を手許に置いて④の注文を作ったのだ。

この『大全本草』とは如何なる本草書か。結論をいえば、『経史証類大觀本草』三十一巻（一一〇八年刊）の翻刻本である。翻刻は、金の貞祐二年（一二二四）に洛陽にちかい嵩州福昌県の書肆夏氏によりなされた。その底本は南宋の淳熙十二年（一一八五）刊本であったと推される。金刊の『大全本草』は、さらに元の大徳六年（一三〇二）に安徽省宣郡に所在したと推される宗文書院によって重刻された。宗文書院本は静嘉堂文庫が一本を蔵する²¹。宗文書院本は直接また間接に多くの重刻本をもち、万里が手にした『大全本草』もまずは宗文書院本かその系統の重刻本であったと考えられる。書名が「経史証類大觀本草」ではなく「経史証類大全本草」である点について、渡邊幸三は「敵国なる宋の大觀なる年号を避け、この書（嵩州夏氏本。池田注）がはじめて、「大全本」に改めたもの」と推定している²²。

小論は『大全本草』の閲覧を、光緒三十年（一九〇四）武昌柯逢時景刊本の影印（廣川書店、一九七〇年）によつて行っている。柯逢時本は、宗文書院本あるいはその直系の本を底本に景刊したテキストである。④は同影印本の三六一～三六二・三六六頁に見える「兗州山茱萸」「海州山茱萸」の挿図は三七一～三七二頁。ほかの①②③⑤も万里が指示し

た所在のとおり、柯逢時本に引用条が見出せる。同影印本の頁数でしめすと以下のとおり。①一二二頁（巻六）、②三六三～三六四頁（巻十三）、③三二二頁（巻十一）、⑤五六五頁（巻二十七）。

万里が『天下白』の撰述に『大全本草』を利用したことは間違いない。『文献輯要』未載の詩まで探索の手をひろげれば、『大全本草』の引用はさらに多く見つかるはずだ。この『大全本草』は承国寺の蔵書であつたらう。『文献輯要』収載詩に限定するけれど、『四河入海』のほかの三抄——『翰苑遺芳』『脛説』『蕉雨餘滴』および笑雲説は、『大全本草』を引いていない。確言は出来ないが、『四河入海』における『大全本草』の引用は『天下白』に限られるのではないか。

万里には三体詩を講じた『晚風集』と、黄庭堅詩を講じた『帳中香』の二抄がある。ここでも万里は『大全本草』を挿図をふくめ引用転載している。また自身の詩文集『梅花無尽蔵』にも『大全本草』を引いている。市木武雄『梅花無尽蔵注釈』（続群書類従完成会、一九九三～九八年）の書名索引を閲するに、つぎの⑥が見つかる。

⑥『梅花無尽蔵』巻三下、「菖蒲囊（端午茂材首座相越）」詩序。

『五山文学新集』第六卷八二二頁。

くだんの詩序全文を引く。

大全本草六菖蒲部云、夏禹神仙経云、菖蒲薄切令日乾者三斤、以絹囊盛之、玄水一斛清者（注云、玄水者酒也）、懸此菖蒲、密封閉一百日、出視之如緑菜色、以一斗熟黍米、内中封十四日間、出飲酒、則一切三十六種風、有不治者悉較。

該文はそっくり、『大全本草』巻六、草部上品之上、菖蒲からの引用である（廣川書店景柯逢時本一三三頁）。本詩は明応八年（一四九九）、万里七十二歳の作。

さて以上の考証を左右することはないのだが、本章の最後に、②の

挿図について少々附言しておく。ほかの転載された挿図にくらべ精度が劣るからだ。上掲の①から⑤のうち、『大全本草』の挿図を転載するのは②③④であつた。これに⑦⑧の三図を追加する。

⑦王本巻十六「寄劉孝叔」詩（『文献輯要』未収）の「故人屢寄山中信、只有当帰無別語」句の「当帰」への万里注。a本は第八冊三六～三七コマ、b本は第十二冊九～一〇コマ、c本第三冊二一八頁。二挿図あり。

⑧王本巻十六「枕榔杖寄張文潜一首……」詩（『文献輯要』未収）の「江辺曳枕榔杖瘦、林下尋苗蕪撥香」句の「蕪撥」への万里注。a本は第八冊四七コマ、b本は第十二冊二三コマ、c本第三冊二六九頁。一挿図あり。

⑦の二図は廣川書店景柯逢時本二二二頁（巻八）、⑧は同二五七頁（巻九）に見える。

b本とc本とを閲するに、②③④⑦⑧の都合八図が『天下白』が転載した『大全本草』挿図のすべてと思われる。なおa本は『大全本草』の挿図を一切省略して写さない。このうち②以外の五図は柯逢時本とよく一致する。万里はかなり丁寧に転写したのだ。しかし②のみやや異なる。②において万里は「大全本草第十三」と題して三つの植物語——「江陵府梔子」「臨江軍梔子」「建州梔子」を載せる。②の三図はb本とc本とも酷似するから、『天下白』原本の挿図をよく保っているだろう。しかし②の三図は『大全本草』巻十三の挿図に間違いないにもかかわらず、柯逢時本のそれと小ささか異なる。念のため静嘉堂文庫蔵宗文書院本の八図の複写を取り寄せて確認したが、結果は変わらない。これはどういうことか。上述のように宗文書院本は多くの重刻本をもつが、各本で挿図に複雑な異同がある。それを反映したと考えるか。②の三図だけ例外的にサイズが小さいから、『大全本草』

の挿図を部分的に写した、あるいは簡略に写したと考えるか。わたしは明解をもたないのだが、几帳面な万里としてはやや不思議ではある。

四 『晞范子脈訣集解』

万里は「新編晞范脈訣歌」なる医学書を引く。『文献輯要』収載詩では左記⑨がある。

⑨ 王本卷三「張寺丞益齋」詩の「虚実在其脉、静躁在其情」句の「虚実」への万里注。a本は第二冊二四コマ、b本は第一冊一五コマ、c本は第一冊三四五―三四六頁。

万里の注文を引く。

某謂、新編晞范脈訣歌心部云、実夢夏驚怪、虚翻煙火明。肝部云、実夢山林樹、虚看細草鋒芒。腎部云、実夢腰難解、虚行涉水。涸。肺部云、実夢兵戈競、虚行涉水田。脾部云、実夢歌歡樂、虚争飲食分。○由夢知五臟虚実。

上掲文はc本から引いた（a本は「某謂」を「按」に作る。b本は当該注部分を落丁したか見あたらず）。「新編晞范脈訣歌」とは如何なる書か。

結論から言えば、南宋末の李嗣『晞范子脈訣集解』十二卷である。晋の王叔和『脈経』十卷の内容を暗誦しやすいよう、五言ないし七言の歌訣の形式にまとめた、いわゆる『王叔和脈訣』一卷がある。王叔和は託名であり、一説には五代の高陽生の撰とするが根拠は明らかでない。通俗の脈学書であり、識者の否定的評価にもかかわらず、南宋から明代前半にかけて非常に流行し幾つも注釈本が著された。そのうちの一書が『晞范子脈訣集解』である⁽²⁶⁾。撰者の李嗣は、字を子野、号

を晞范子、臨川の人という。清初の朱彝尊『曝書亭集』卷五十五に「書宋本晞范子脈訣集解後」があり、本書が南宋最末期の咸淳二年（一二六六）の刊行と知られる。本書は残念ながらすでに散佚したが、後続の『王叔和脈訣』注釈本が李嗣注を引用するお陰で佚文がこり、またベルシヤ語訳があつて現存する。ベルシヤ語への翻訳を主導したのは、イル・ハーン国（フレグ・ウルス）の宰相であり、『集史』の著者として有名なラシード・ウツ・デイーンであつた。ベルシヤ語訳は元代漢語の対音資料として活用されている⁽²⁷⁾。

⑨は『晞范子脈訣集解』の佚文ということになるのだが、五言句の形式から推測されるように、万里が引用した傍線部分は李嗣の注文ではなく『王叔和脈訣』の正文である。撰者未詳『纂図方論脈訣集成』四卷（一六二二年朝鮮刊本⁽²⁸⁾）と元の戴啓宗『脈訣刊誤』二卷（文淵閣四庫全書本）によつて、わたしはこれを確認した。両書は『王叔和脈訣』の注釈書で李嗣注を引く。『晞范子脈訣集解』は『王叔和脈訣』の正文を取りこみ、これに注解の文章をつづける体裁だったようだ。「由夢知五臟虚実」は万里の按語か。

『文献輯要』未収の蘇詩では、たとえばつぎの⑩がある。

⑩ 王本卷四「贈李道士」の「腰間大羽何足道、頰上三毛自有神」句の「三毛」への万里注。a本は第二冊四六コマ、b本は第二冊一六コマ、c本は第一冊四三二頁。

万里の注文を引く。

受第二句也。某謂、晞范脈訣云、七孔多聰恵、三毛上智英。劉子注云、心形於光、上智人心有七竅三毛、中智人心有五竅二毛、下智人心有三竅一毛、常人心有二竅無毛、愚人心有一竅、大愚人心有一竅甚小云々。然則雖頰上益三毛、愷之表上智人心三毛、而尽之邪、不徒然。

『纂図方論脈訣集成』『脈訣刊誤』で確認するに、傍線部分は『王叔和脈訣』の正文、二重傍線部分は李嗣の注文と判明する。²⁸⁾

わが中世禅林において、『晞范子脈訣集解』は同じ撰者の『晞范句解八十一難経』八巻とともに読まれていた。このあたりの事情は宮紀子の研究に詳しい。²⁹⁾この『晞范子脈訣集解』も承国寺の蔵書だろう。『天下白』をさらに調査すれば、『晞范子脈訣集解』の利用はさらに拡がるかもしれない。

五 『全芳備祖』

医学書ではないが本草書に準じる漢籍として、『全芳備祖』五十八巻の引用を取りあげる。同書は南宋後期に陳景沂が編んだ植物事典である。四部分類では子部農家類に分類されることが多いと思うが、植物に特化した類書と考えてもよい。正式には『天台陳先生類編花果卉木全芳備祖』といい、「全芳備祖」は簡稱である。

『文献輯要』の収載詩で挙名して引かれるのは、つぎの①である。

① 王本巻卷十「和子由記園中草木十一首」其一の「懷宝自足珍、藝、蘭、那計畹」句の「藝、蘭」への万里注。a本は第五冊三四コマ、b本は第六冊四コマ、c本は第二冊三六七頁。

該句は王本の厚注が指摘するように、屈原「離騷」（『文選』巻三十二）の「余既滋蘭之九畹兮、又樹蕙之百畝」をふまえる。蘭と蕙とは香草にして徳の象徴でもあり、蘇軾は蘇轍が倦むことなく徳を養っていると言っている。万里は「文選三十二載屈原離騷経云、余既……」と、『文選』から「離騷」の正文と王逸注、呂延済注とを引き、ついで「又全芳備祖蘭部、滋、音栽」と注する。『全芳備祖』の文章は、前集巻二十三、花部、蘭花（蕙花附）の「余既滋蘭之九畹兮（畹、畦

也。滋、音栽、又樹蕙之百畝」が典拠である。王逸注は「滋、蒔也」、呂延済注は「滋、益也」と言うのみなので、『全芳備祖』から音注を転引したわけだ。この『全芳備祖』も承国寺の蔵書に違いなく、同書を借り受けその子目を手掛かりに搜文したのでだろう。

つぎの②も『全芳備祖』の可能性がたかい。

② 王本巻十「小甫五詠・地黄」詩の「崖蜜助甘冷、山薑発芳辛」句の「山薑」への万里注。a本は第五冊五三コマ、b本は第六冊二二コマ、c本は第二冊四一一頁。

万里は「某謂……次公注云、山薑朮也。按本草、朮、一名山薑也」という。「次公注云、山薑朮也」というのは、王本の割注「次公、山薑朮名、古方用朮也」をさす。問題は「按本草……」の出処である。『大全本草』巻六、草部上品之上、朮に「一名山薑」の四字がある（廣川書店景柯逢時本一四四頁）。しかし『全芳備祖』後集巻二十九、薬部、朮にも「朮、山蘇（爾雅）、一名山薑、一名山劬……（本草）」とある。『天下白』が「按大全本草」ではなく、ただ「按本草」と言うところを見るに、くだんの典拠は『全芳備祖』が妥当と思われる。

上掲①に關聯して、『天下白』がよった『文選』について一言。「離騷」が配された巻数や、王逸注と呂延済注とを併せ引くことを勘案すれば、万里が手にした『文選』は、六家注本（五臣、李善の順）あるいは六臣注本（李善、五臣の順）だったと考えられる。①のa本とb本とは「呂延済注云」のすぐ横に「文選注六臣ノ中ノ一人也」の傍字がある（c本にはなし）。万里の注記とすれば、この私見を支持する一証と見なせる。『天下白』所引の呂延済注に「樹、蕝也」とある。『文選』にはくだんの呂延済注を、「樹、藝也」に作るものと「樹、蕝也」に作るものと、二様のテキストがあるようだが、万里がよったのは後者と知られる。「藝、蘭」について、万里が「藝字可作蕝歟。蕝、

子習切、草木生貌」と注するのは、呂延濟注をふまえている。これらの条件を満たした『文選』が万里の依拠本であり、承国寺の蔵した本ということになる。なお傍線部分は『大広益会玉篇』卷十三（中華書局本六六頁下左）によつたと推される。『全芳備祖』引用のすぐあとに、万里が「蒔、玉篇、石至切」と注するのはその一証である。

六 結びにかえて

小論は、『文献輯要』に収載された蘇軾詩百五十二首に限つて、『天下白』が引用する宋元医学書を調査した。果たして、『大全本草』と『晞范子脈訣集解』との二書、および『全芳備祖』の利用を確認した。パリエーションが豊富とは言い難いのは、換言すれば要領のよい引証とも受け取れる。ともに承国寺の蔵書であつたらうが、同寺が蔵する宋元医学書がこれらに限るとは考えにくい。調査の継続がもたらされる。

小論の最後に、以下の三点を指摘しておきたい。第一に中国の出版業との関係について。南宋に商業出版が盛行し始めてのち、中国における書籍の流通量は格段に増加した。くだんの増加は、日中間の盛んな交易を媒介に、日本への漢籍の舶載量の増加をもたらしただけに違いない。医学書も例外ではないはずだ³¹。二万餘巻と称される蔵書を承国寺が有していた背景に、南宋以降の書籍出版の拡大を想定することは合理性がある。

第二に地方における漢籍の所蔵について。漢籍の舶載量の増加は、京都や鎌倉といったいわば中央だけでなく、地方における漢籍の蔵儲を後押ししたはずだ。そうであればこそ、美濃の一寺院に過ぎない承国寺が上述の豊富な漢籍を、しかも創建から比較的短期間のうちに蔵

せたのだ。書籍は「知」の源泉である。地方における漢籍の充実は、すなわち地方における中国的な「知」の蓄積を意味しよう。小川剛生は、「一般に中世文化史では京都から地方への伝播という方向が論じられるが、地方が中央の文化を吸収する力も非常に強かった」と指摘した³²。斎藤夏来は、「五山文学の重要な生成と受容の場は夷中である」と述べた。「夷中」とは「京都を離れた地方」ほどの意味らしい³³。応仁の乱によつて中央の文化が地方に拡散したことは事実であるうけれど、それを受容消化するだけの「知」がすでに地方に準備されていたと整理できる。承国寺の漢籍は、地方における中国的な「知」の充実の一微証と解せられる。

第三に『天下白』のテキストについて。小論の限られた調査からの知見だが、『天下白』のテキストとしては、c本がa本・b本に優るようだ。a本は①⑤で、b本は⑨で誤脱がそれぞれあつた。c本にはこのような脱文は発見されない。くわえて『天下白』が転写した『大全本草』の挿図を、すべて丁寧³⁴に再転写したのはb本とc本とであつた。『四河入海』を編むにあたり、笑雲清三が入手した『天下白』鈔本は優れたテキストであつたらしい。くわえて編者の校正も抜かりがなかつたということだろう。

注

- (1) 小川環樹「宋代の詩人と作品の概説」（『小川環樹著作集』第三巻、筑摩書房、一九九七年。初出一九六七年）二九頁。
- (2) 三浦國雄「文人と養生Ⅱ——『東坡養生集』を読む」（『気の中国文化——氣功・養生・風水・易』創元社、一九九四年。初出一九八八年）一四六頁。ほかに三浦「文人と養生——陸游の場合」（『坂出祥伸編『中国古代養生思想の総合的研究』平河出版社、一九八八年）、大平桂一「日々と四季の健康法」（『荒井健編『中華文人の生活』平凡社、一九九四年）など。

- (3) 服部敏良『鎌倉時代医学史の研究』(吉川弘文館、一九六四年)四八〜六五頁、新村拓「中世医療体制の構造」(『古代医療官人制度の研究』法政大学出版局、一九八三年。初出本書)など。
- (4) 上田純一「禅宗における医僧と医療の問題について」(『禅学研究』第七三号、一九九五年)、同「寺院の医療システム——禅宗教団を例として」(『日本歴史』第七七六号、二〇一三年)、新村拓「日本医療社会史の研究——古代中世の民衆生活と医療」(法政大学出版局、一九八五年)三五頁、同「僧と医師を兼ねる者たち」(『日本仏教の医療史』法政大学出版局、二〇一三年)、小曾戸洋(研究代表者)『扁鵲倉公伝』幻雲注の翻字と研究(一九九四〜九五年度科研費研究報告書)収載の諸論文、田中尚子『史記抄』「扁鵲倉公伝」にみる桃源瑞仙の志向性——室町期の学者たちと医学・医学書(『室町の学問と知の継承——移行期における正統への志向』勉誠出版、二〇一七年。初出二〇一二年)、同「月舟寿桂と医学——『幻雲文集』に見る五山と医家の接点」(同前書。初出二〇一三年)など。
- (5) 倉田淳之助「東坡抄と山谷抄」(内田智雄編『米澤善本の研究と解題』ハーバード・燕京・同志社東方文化講座委員会、一九五八年)、同「施注と翰苑遺芳」(小川環樹・倉田淳之助編『蘇詩佚注』上、倉田淳之助、一九六五年)、鈴木博「四河入海について」(岡見正雄・大塚光信編『抄物資料集成』第七卷、解説索引篇、清文堂、一九七六年)など。
- (6) 玉村竹二「万里集九集解題」(玉村編『五山文学新集』第六卷、東京大学出版会、一九七二年)一一六三〜六四頁、蔭木英雄『中世禅林詩史』(笠間書院、一九九四年)四七〇頁。
- (7) ほかに国立国会図書館蔵古活字本が、中田祝夫編『抄物大系 別巻』全十二冊(勉誠社、一九七二年)に影印されている。
- (8) 最も網羅的な蘇軾詩の目録である東北大学中国文学研究室編『蘇東坡詩作品表』(同研究室、一九八二年)には二千七百九十八首をおさめる。
- (9) 域外漢籍珍本文庫編纂出版委員会編『日本五山版漢籍善本集刊』第三・四卷(西南師範大学出版社・人民出版社、二〇一二年)。王本については最近、北京の国家図書館蔵宋黄善夫家塾刊本が、国家珍貴古籍叢刊にて影印された(国家図書館出版社、二〇二四年)。五山版の影印は、影印過程で発生したのであろう、印刷不良で文字が読めない頁が少なくない。その不備を国家珍貴古籍叢刊本で補った。
- (10) 引地歩「万里集九著『梅花無尺蔵』に見る承国寺詩会」(『地域文化研究』第四一号、二〇二四年)。
- (11) 玉村竹二「万里集九集解題」(前掲)一一四九頁、中川徳之助『万里集九』(吉川弘文館、一九九七年)一二九頁。万里の伝記については、玉村と中川の両著作に多くを教わった。万里については、ほかに大戸安弘『万里集九の教育活動——15世紀後期における地方武士との交渉を通してみた』(『教育学研究』第五〇巻第二号、一九八三年)、市木武雄・梅田薫『万里集九著『梅花無尺蔵』の世界』(鶴沼歴史研究会、二〇〇五年)、内山精也『万里集九と宋詩』(『宋詩惑問——宋詩は「近世」を表象するか?』研文出版、二〇一八年。初出二〇〇六年)、城市真理子「室町水墨画の「煎茶」——文人図様をめぐる」(『室町水墨画と五山文学』思文閣出版、二〇一二年。初出二〇〇七年)など。
- (12) 各務原市埋蔵文化財調査センター編『承国寺遺跡発掘調査報告書』(各務原市教育委員会、二〇〇四年)一〇三頁は、一四五〇年ごろ創建説。横山住雄「臨濟宗五山派・美濃承国寺の興亡史」(『花園大学国際禅学研究所論叢』第三号、二〇〇八年)七頁、同「美濃土岐氏」(『戎光祥出版』二〇一四年)八八頁は、文安元年(一四四四)から間もなくのころ創建説。
- (13) 各務原市埋蔵文化財調査センター編『承国寺遺跡発掘調査報告書』(前掲)。
- (14) 中川徳之助『万里集九』(前掲)一一八〜二〇頁。ほかに芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』(思文閣出版、一九八一年)一六七頁、蔭木英雄『中世禅林詩史』(前掲)四七七〜四七八頁。
- (15) 文明十三年(一四八二)ごろ承国寺に住した「南豊主盟言叔和尚」がいる(『梅花無尺蔵』巻二。『五山文学新集』第六卷七二頁)。玉村竹二「中世前期の美濃に於ける禅宗の発展」(『日本禅宗史論集』下之二、思文閣出版、一九八一年。初出一九七五年)四一三頁および注八五、横山住雄「臨濟宗五山派・美濃承国寺の興亡史」(前掲)一一頁。「江叔」の字から想像するに、あるいは言叔の弟子筋の僧か。
- (16) 玉村竹二『五山禅僧伝記集成 新装版』(思文閣出版、二〇〇三年。初版一九八三年)一八二〜一八四頁。
- (17) 伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』(吉川弘文館、二〇〇二年)七七〜八一頁。
- (18) 中川徳之助『万里集九』(前掲)一四三〜一五三頁、今泉淑夫「禅僧たちの室町時代——中世禅林ものがたり」(吉川弘文館、二〇一〇年)二一四頁など。『天下白』撰述後、明応三年(一四九四)、万里六十七歳の作だが、その七絶「群書(二日)」冒頭二句に「海蔵五千餘白蠹、山房一万卷紅螢」とある(『梅花無尺蔵』巻三上。『五山文学新集』第六卷七九〇頁)。竜宮の五千餘巻の蔵書に対し自分の書齋には一万巻の書籍があるという。承句の「万」字の位置は仄声でなければならぬから、「万」字を用いたか。中川

- 徳之助『万里集九』（前掲）は、万里が晩年まで自著の抄物に加筆していた可能性を指摘する（二二〇頁）。承国寺の蔵書も晩年まで利用していただろうが、「一万巻」は同寺からの借用にしては数字が大きすぎる。実数ではなく文学的誇張と考えておくのがよいだろう。
- (19) 中村裕一『中国古代の年中行事 第三冊秋』（汲古書院、二〇一〇年）七四一頁、七四一・七四二頁、植木久行『唐詩歳時記』（講談社、一九九五年）二七九～二八三頁、寺井泰明『菜菔』と『ぐみ』（『日中言語文化』六集、二〇〇八年）など。
- (20) 以下、『大全本草』所引の各書については、渡邊幸三『読証類本草須知』（『本草書の研究』武田科学振興財団、一九八七年。初出一九六五年）参照。静嘉堂文庫編『静嘉堂文庫宋元版図録』（静嘉堂文庫、一九九二年）に一九九番として書影および解題。ほかに畿紹邊編著『日藏漢籍善本書録』中冊（中華書局、二〇〇七年）九二～九一四頁など。
- (22) 渡邊幸三『唐慎微の経史証類備急本草の系統とその版本』（前掲『本草書の研究』。初出一九五二年）六〇頁。『大全本草』およびその後続本について、小論の記述は渡邊の本論文に負うところが多い。ほかに岡西為人『本草概説』（創元社、一九七七年）一一〇～一一二頁。南宋刊本が金に流入し翻刻される事態は、南宋の書禁や金の出版事情を考えるうえで興味ぶかい。じつは王本にも金刊本があつて、わずか六葉だけが現存するらしい（中国国家図書館蔵。池田は未見）。孔凡礼『南宋著述入金考』（『孔凡礼文存』中華書局、二〇〇九年。初出一九九三年）四四三～四四四頁など。
- (23) 郭雪妮『晁風集』本草図注与日本禅林学問史の新変（『域外漢籍研究集刊』第二五輯、二〇二三年）、緑川英樹『万里集九《帳中香》的詩学文献価値』（『清華学報』新五一卷第二期、二〇二一年）二九五～二九六頁。『大全本草』は五山禅林で重宝されたようである。黄庭堅詩の抄物たる『山谷幻雲抄』『黄氏口義』にも同書の引用があるらしい。蔦清行『五山禅僧と医界——黄山谷の詩の抄物から』（『日本語・日本文化研究』第二九号、二〇一九年）三九頁参照。
- (24) b本はおそらく『天下白』所載の『大全本草』挿図をもらさず転載している。そのことはb本の残存十五巻とc本との対校から推察できる。また笑雲が『四河入海』を編むさい、忠実に『天下白』の挿図を模写したことも分かる。
- (25) WEBで公開され閲覧が容易な宗文書院本系の本で確認しておく。たとえば、国立公文書館に朝鮮王朝初期の刊行と思しく本が蔵せられる（昌平坂学問所旧蔵。国立公文書館デジタルアーカイブにて公開）。底本は宗文書院本である。同本の巻十三「越州呉菜菔」図（六七〇コマ）④の挿図と、同巻「江陵府柘子」「臨江軍柘子」「建州柘子」図（七二・七三コマ）②の挿図とは、柯逢時本と全同である。しかし同じく宗文書院本を重刻したという万暦五年（一五七七）刊本（京都大学貴重資料デジタルアーカイブにて公開）は、④の挿図（六七五コマ）と②の挿図（六八〇コマ）とも柯逢時本と異なる（②の挿図は『天下白』のそれとちがう）。版下を作製するさい底本の挿図をどれほど忠実に再現するかは、書肆などの方針で決まるだろう。
- (26) 岡西為人『中国医書本草考』（南大阪印刷センター、一九七四年）三六～三七頁、同『宋以前医籍考』上（学苑出版社、二〇一〇年）一七〇～一七一頁、水溜亮一『王叔和脈訣』の書誌について（『日本医史学雑誌』第六一卷第一号、二〇一五年）、同『王叔和脈訣』の版本について（『日本医史学雑誌』第六二巻第二号、二〇一六年）など。
- (27) 羽田亨一『ペルシャ語訳『王叔和脈訣』の中国語原本について』（『アジア・アフリカ言語文化研究』第四八・四九号、一九九五年）、遠藤光暁『王叔和『脈訣』ペルシャ語訳に反映した14世紀初中国音』（『中国音韻学論集』白帝社、二〇〇一年。初出一九九七年）、同『元代音研究——『脈訣』ペルシャ語訳による』（汲古書院、二〇一六年）。
- (28) 『韓国科学技術史資料大系』医薬学篇三九（驪江出版社、一九八八年）影印本による。
- (29) 二重傍線部分について、「劉子注云」とあるので、北齊の劉昼の撰とも言われる『劉子』（子部雑家）の唐・袁孝政注をまず思いつくのだが、『劉子』およびその注に同文は見つからない。「劉子」云々は、いま明の朱橚ら『普濟方』巻一、方脈総論、五臟像位にほぼ同文が見出せる。『晞范子脈訣集解』と『普濟方』と、共通する典拠があるのだろうか。
- (30) 宮紀子『*Tanhsig namuh*の『脈訣』原本を尋ねて——モンゴル時代の書物の旅』（『モンゴル時代の「知」の東西』下、名古屋大学出版会、二〇一八年。初出二〇一〇年）、同『ユーラシアの東西で読まれた医学書』（『クビライ・カアンの驚異の帝国——モンゴル時代史鶏肋抄』ミネルヴァ書房、二〇二五年）。
- (31) 小曾戸洋『日中医薬文化交流史——博多を窓口として』（『日本医史学雑誌』第四三巻第三号、一九九七年）二四六～二五三頁、同『卷子写本から宋元版へ——中世日本における中国医学書受容の様相』（『日本医史学雑誌』第四四巻第四号、一九九八年）、同『南宋代の医薬書（その1）』（その6）（『現代東洋医学』九巻一号～一〇巻二号、一九八八～八九九年）。

- (32) 小川剛生『武士はなぜ歌を詠むか——鎌倉将軍から戦国大名まで』(KADOKAWA、二〇一六年。初版二〇〇八年)一五〇頁。
- (33) 斎藤夏来『五山僧がたなく列島史——足利政権期の宗教と政治』(名古屋大学出版会、二〇一八年)二四三・一八七頁。

【附記】本研究は、科研費「基盤研究(C)(一般)」(課題番号：23K00308)の研究成果の一部である。

(京都産業大学教授)